

春播ハクサイ、露地ナスにおけるヒメハナカメムシ類の発生動態についての知見

河野勝行 (野菜・茶業試験場久留米支場)

Katsuyuki KOHNO : Occurrence of *Ortus* spp. from Spring to Early Summer on Chinese Cabbage and Eggplant

ヒメハナカメムシ類 (以下ヒメハナと略) *Ortus* spp. は露地ナスにおけるミナミキイロアザミウマ *Thrips palmi* 等のアザミウマ類の密度抑制要因として重要であることが明らかにされている²⁾。しかし、ヒメハナの野外における生態については不明な部分が多い。

筆者は春播ハクサイにおいて比較的多数のヒメハナを観察した³⁾。そこで、ヒメハナの春播ハクサイにおける動態を明らかにするために、春播ハクサイと露地ナスでヒメハナとアザミウマ類の発生活消を比較した。

1. 試験方法

調査は、野菜・茶業試験場久留米支場内圃場で行った。ハクサイの品種は「無双」で、1畦23株で4畦、計92株を株間50cmで4月27日に定植し、6月20日に収穫した。調査は5月2日から6月20日まで12回、5月19日までは全株、5月22日以降は、各畦15株(計60株)について、全葉に寄生するアザミウマ類とヒメハナを計数した。結球後はアザミウマ類の調査が困難になったので、アザミウマ類の調査は6月9日で終了した。

ナスの品種は「庄屋大長」で、1畦40株で3畦、計120株を株間50cmで4月27日に定植した。調査は5月8日から8月2日まで16回、6月13日までは全株、6月26日以降は中央の1畦(40株)の各株2葉に寄生するアザミウマ類とヒメハナを計数した。

ヒメハナの種の識別は、調査圃場の調査株以外の株からヒメハナを適宜採集し、雄については交尾器で³⁾、また雌については、1世代飼育し、子世代の雄成虫交尾器で同定した。

2. 結果および考察

ハクサイでは定植後まもなく土着のアザミウマ類成虫が飛来し、5月末頃まで比較的高い個体群密度で推移したが、その後急激に密度が低下した(第1図a)。幼虫の発生も認められたが、密度は低かった。ヒメハナは5月22日から6月20日にかけて、ナミヒメハナカメムシ(以下ナミヒメと略) *O. sauteri*、コヒメハナカメムシ(以下コヒメと略) *O. minutus*、ツヤヒメハナカメムシ *O. nagaii* の雌成虫のみが観察され、幼虫の発生は認められなかった。

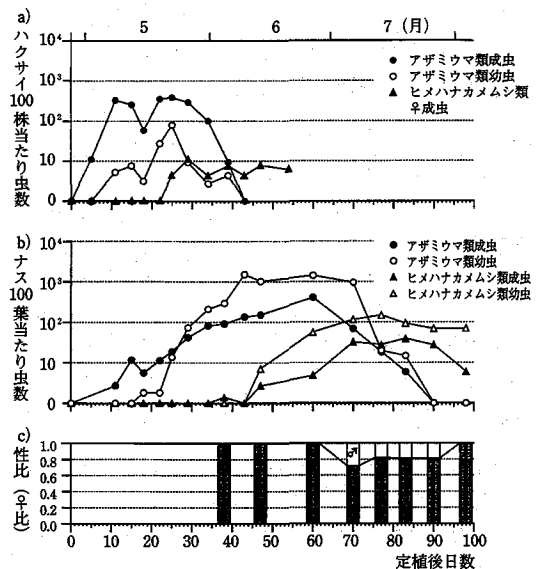
露地ナスでは定植後、ミナミキイロアザミウマを主としたアザミウマ類成虫の個体群密度が徐々に上昇し、5月下旬頃から幼虫の密度も急激に上昇した(第1図b)。成虫、幼虫とも7月上旬まで高い個体群密度で推移したが、その後密度は急激に低下した。ヒメハナは、ナミヒメあるいはコヒメの雌成虫が6月4日以降、幼虫が6月

13日以降、雄成虫が7月6日以降、連続的に観察された(第1図b,c)。同定されたナミヒメとコヒメの個体数比は約7:1であった。

発生時期の観点から考察すると、6月中にナス上で観察されたヒメハナ成虫が第1世代である可能性も考えられる。しかし、ハクサイ上でアザミウマ類の密度が高まる期間がヒメハナの繁殖のために十分であると推測されるにもかかわらず繁殖が確認できなかったことは、ヒメハナ越冬成虫がアザミウマ類の密度が高まるハクサイなどの植物の上で採餌し、その後ナス圃場に侵入し繁殖することを示唆するものとも考えられる。ヒメハナがハクサイ上で繁殖しない理由について、卵巣成熟度の季節的推移なども含め、今後さらに詳しく調査する必要がある。

引用文献

- 1) 河野勝行: 野菜・茶試久留米研究年報 8, 202-203, 1995.
- 2) 永井一哉: 応動昆 34, 109-114, 1990.
- 3) 安永智秀・柏尾具俊: 植物防疫 47, 180-183, 1993.



第1図 アザミウマ類とヒメハナカメムシ類の発生活消とナスにおけるヒメハナカメムシ類の性比の推移